



ひとりひとり「違う」があたりまえ

園長 野中 泉

6月、すいか組に新しいお友達が来ました。Zちゃんです。Zちゃんは、少しみんなと違います。保育園に来る日は、ひとりではなくて、看護師さんと一緒に来ます。保育園にいる間にも気管切開しているのどの穴から痰（たん）の吸引をしたり、胃ろう（胃にあけた穴）からの水分補給など『医療的なケア』が必要だからです。

登園初日の朝、すいか組のみんなに紹介されたZちゃんは抱っこしてくれている看護師さんにしがみつき、固まっていました。「Zちゃん、よろしく」と言っても顔をあげず、「ほら、青虫やで」と、ともっきー（山本保）が手のひらに乗せた青虫を見せても、横目で青虫をちらりと見て、またすぐに看護師さんの胸に顔をうずめてしまいました。ある意味大人には予想通りの彼の姿を黙って見守りながら、私は、このZちゃんをすいか組の子どもたちは、どんな風に受け止めるんだろう？とっていました。すると、ひとりの子が「青虫もZちゃんも、すいかさんに、はじめて来たから緊張してるんやな」と言い、それを聞いたみんなが「そうだ」「そうだ」ワハハと笑ったのです。その瞬間「はじめての医療的ケア児の受け入れだ」と、ある意味でZちゃん以上に緊張し肩に力が入っていた私自身の杞憂も、ワハハと笑い飛ばしてもらったような気がしました。

すいか組の子どもたちはあつという間にZちゃんを仲間に入れてくれました。なんやかんやとZちゃんの世話をやく女の子たち、お気に入りの怪獣をゆずってくれる男の子たち。パズルしようよと誘ってくれたり、こっちにビワの実がなってるよと呼んでくれたり。そうかと思うと、Zちゃんと看護師さんがいても、気にせず、自分たちの遊びに夢中になっている子たちもいて、私たち大人が拍子抜けするほど、子どもたちはZちゃんに来る日もいつもどおりです。けれど、子どもたちは、決してZちゃんの「違い」に気づいていないわけではありません。首に細い管をいれてたんを吸うところも、お腹の穴から長いストローでお水を飲むところにも興味津々、「何してるの？」「どうして、お腹からお水飲むの？」とみんなが見に来ます。でも、大事なことだと感じていて、誰も邪魔したり、いたずらしたりせずに、ジーンと見つめるだけです。何日めかの登園の朝、いつもより早く着いたZちゃん。看護師さんがまだ到着していませんでした。すると、あいねちゃんがやってきて、Zちゃんのママにこう聞きいたそうです。「そしたら（看護師さんいなかったら）Zちゃんのゼロゼロは誰がとってくれるの？」

「違う」ということを理解した上で、排除しない。普通に、とても自然に「多様」であることや手助けが必要なことを受け入れている子どもたちの姿には、教えられることがいっぱいです。

固まっていたZちゃんも、初日の帰る頃（お昼）には笑顔に。週に2回の登園のせいもあり、まだ、毎回朝のうちは、恥ずかしそうに看護師さんの側を離れないのですが、家では「明日アトムやで」というと、「アトム、すいか」と手をバタバタさせて喜んで聞いて聞き、うれしくなります。

世の中、特に保育や教育の現場で「インクルーシブ」という言葉がさかんに使われるようになって何年かたちます。それ以前の日本の障害児保育（教育）では、大多数の健常児の生活や活動に、少数の障害児が参加できるように手助け（支援）をするという考え方が一般的でした。でも、インクルーシブの考え方は、支援児だけが特別な子という見方に立ちません。健常児もまた、一人ひとり違う。すべての子どもが、一人ひとりかけがえのない異なる子どもであるという大前提が、その考え方の基本にあり、その中には手助けが必要な子がいることもまた、あたりまえです。そして、こうして改めて言葉にしてみると、世の中が「インクルーシブ」という言葉を使うようになるずっと前から、アトムの保育は、それを大事にしてきたはずだと、今更のように思いあたるのです。

登園日の翌日、土曜日の朝。この日はお母さんといちご組の弟を送りに来て帰るZちゃんを見つけて、中庭からすいか組のわーくんが「Zちゃ〜ん」と大きな声で呼びました。「ほら、Zちゃんって、すいか組のお友だちが呼んでくれてるよ」そう言ったママを見あげて、Zちゃんは恥ずかしそうに、でもとっとうれしそうに笑いました。